韓 国 訪 問 の 記*

森 八 蔵**

大山東工大学長が韓国化学工学会の招待により、1週間の日程で韓国の大学・工場などを視察し、おもな大学で特別講演をされることとなった。その随員として日本の化学工学協会の関東支部長（森）、東海支部長（高原さん）、関西支部九州地区幹事（三石九大教授）の3人が加わり、昨年12月5日羽田に勢揃いして出発した。

航空時間2時間と10分で、ソウル飛行場に到着、洪允命韓国化学工学会長、李樑ソウル大学校工科大学長らの出迎えを受け、以後予定されたスケジュールによって釜山、蔚山、慶州、大邱、ソウルの各都市を訪問し、大学、工場などを視察し（表1、2参照）、講演会、産学協

同懇談会などに出席し（表3、4参照）、12月11日大山団長歓送会があって、公式旅程を終了した。

その後、三石、森両団員は漢陽大学校化学工学科の南宮教授の特別の計らいにより、忠州肥料工場、湖南肥料工場を訪問し、また、仁川市にある5つの工場を視察することができた（表5参照）。

全期間を通じて、洪化学工学会会長始め多くの関係者の特別の御配慮を賜り、心よい旅行を続けることができた。ここに記して感謝の意を表したい。なお旅行中の見聞について当協会会員にいくらかでも参考になりそうなことを摘録して報告にかえたいと思う。

表1 視察した大学

12/6（月）	ソウル	(1) ソウル国立大学校工科大学 (2) 原子力研究所 (3) 延世大学校化学工学科 (4) 漢陽大学校化学工学科
12/10（金）	ソウル	

表2 視察した工場

12/7（火）	釜山	(1) 金見社（電機メーカー） (2) 大韓造船公社 (3) 大韓陶器（株）
12/8（水）	釜山	(4) 大韓酸酢（株）
	蔚山	(5) 大韓石油公社
12/9（木）	大邱	(6) 第一毛織工業（株）

表3 講演会

12/6（月）	ソウル	国立工業研究所大講堂にて（聴講者約100名） (1) 輸送現象について 60分（三石団員） (2) 研究の工業化に関する諸問題 60分（大山団長）
12/7（火）	釜山	釜山大学校工科大学大講堂にて（聴講者約200名） (3) 飛沫同伴について 60分（三石団員） (4) 化学技術会社のあり方 60分（森団員）
12/9（木）	大邱	青丘大学校大講堂にて（聴講者約200名）

(5) 研究の工業化に関する諸問題

60分（大山団長）

(6) 化学工場の管理について

60分（高原団員）

12/10（金）ソウル

漢陽大学校大講堂にて（聴講者約150名）

(7) 工業用水の諸問題 40分（大山団長）

(8) 化学工場の管理について

40分（高原団員）

(9) 化学工場の設計建設について

40分（森団員）

(10) 高分子の化学工学 40分（三石団員）

表4 産学協同懇談会

12/7（火）	釜山	(1) 市内レストランにて	出席者約25名
12/9（木）	大邱	(2) 商工会議所にて	出席者約40名

表5 公式旅程終了後視察した工場

12/13（月）	忠州	(1) 忠州肥料公社	忠州工場
12/14（火）	羅州	(2) 湖南肥料公社	羅州工場
12/16（木）	仁川	(3) 新韓製粉（株）	富平工場
	"	(4) 大成木材（株）	
	"	(5) 韓国機械（株）	
	"	(6) 利川電機工業（株）	
	"	(7) 韓国ガラス工業（株）	

* 昭和41年4月9日受理

** Hachizo Mori 千代田化工建設（株）

1. 講演会——産学協同懇談会

公式訪問の町、ソウル、釜山、大邱、ソウルと4回の講演会があり、釜山、大邱では産学協同懇談会が催された。講演会は翻訳付、懇談会は大部分日本語、一部若い人の韓国語の質問だけが日本語に翻訳されるといった形であった。

懇談会などでは、こちらは自由に何でもしゃべれるし、相手は熱心な顔付きで聞いてくれる。全く私にはありがたいことであった。もしこれが英語を仲介とした形式であったとすれば懇談はあのように燃え上がらなかったであろう。

懇談会に出てくる若い人たち、化学工場で年齢以上に重い責任を背負っているらしい若い人達の熱心な顔、眼、困難にぶつかっていることを如実に示すような真剣な質問、それに応答することは実に楽しかった。彼らは何をつかんだのだろうか、別れるとき眼を輝かして固く握手して行った。それぞれに新しい工夫と試みをこらして困難を打開し、工場の操業を改善することだろう。

新聞によると、韓国は加工貿易によって食って行くしかない。安い労賃を利用して日本からもその他からも原料を輸入し、製品の大半を輸出することが計画されている。その一例として、第一毛織工業(株)の大邱工場を視察したが、なかなか立派な工場であり、立派な製品を出していた。その他の工場でも同様のことを目標としており、行く行くは日本の産業にも重大な影響を及ぼすまでに成長するにちがいない。

最初の講演会場であった国立工業研究所の表玄関にはデカデカと建設・増産・輸出の標識板が掲げられていた。

懇談会で熱心に話を聞いていたあの若い人達の眼は建設への希望に燃え、耐乏の決意に輝いていた。韓国はいま、国を上げて建設に邁進しようとしている。

2. 学校と銀行と工場

「郊外にある立派な建物、それは学校、市内にある立派な建物、それは銀行」という話。教育の普及度は高く大学の数は多い。しかし産業は未発達であって大学を出たけれど、就職口は少なく、なかには西独炭鉱労務者として渡航する人も多い由。世界国家が提案されようといういまの世の中、無理をして産業を興すよりもむしろ大学生をドンドン他の地方に送り出す方が良策ではないかなどと話合った。

一方、立派な建物の銀行は聞く所によると貸付利子年30%の高率で繁栄しているらしい。こんな高利の金を借りたのでは工業を興すことはむずかしい。造船も公

社、石油も公社、肥料も公社ということになるのもうなずける。

しかし驚いたことは大邱市にある第一毛織工業(株)の毛織物工場である。工場配置にしても、工場建物にしても近代的な感覚に溢れ、生産設備は十分の余裕をもって作られ、立派な毛織製品が流れ流れてたたまれている。さらに女子従業員の宿舎、洗濯場、浴場、美容室、お茶、お花の稽古場などの完備していること、日本の工場も最近はこんなふうになっているのだろうか。女工哀話などここでは想像することもできない。また、仁川市で見た板ガラスの工場も立派である。学生時代に旭ガラス(株)の工場を見たきりの私には批判の能力はないが、当時の日本の工場とは段違い、はたして現在の日本の工場とはどの位の比較になるのだろうか。最近、技術導入されたという溶融錫上を引っ張る新しい磨き板ガラスの製法を早く見たいものだなど、考えながらガラス溶融炉の構造などに見入っていた。

ついでながら、ガラス工業には化学工学的に貴重な素材がたくさん蓄積されていて、化学工学者が探索するのを待っているのではなかろうか。実験と経験とで築き上げられた高温の装置と技術、それは見事なものだと感心せずにはおられない。

3. 造船公社—石油公社—肥料公社

大邱の第一毛織工業(株)を経営している SAMSUNG グループは大きい財閥であって、この他に砂糖会社、醱酵会社、その他関係会社を経営している。しかしどの工場も民営というわけではない。造船、石油、肥料などには国営のものがある。銀行利子が年30%という状態では民営で新たに始めることは、なかなかむずかしきだろうと思われる。仁川で出会ったある工場長は「食料品関係ならば民営で何とかやって行ける。それ以外の化学工業にはちょっと、手が出せないですよ」と言っていた。

団として公式に訪問した工場の中に、釜山の韓造船公社と蔚山の韓国石油公社とがあった。韓造船公社は造船のかたわら化学機器も作っている。設備は日本の造船会社とは比較にならない。韓国石油公社はアメリカの資金援助によって、日本海側にできた蔚山製油所を経営している。建設時アメリカ人技術者が使っていた宿舎、クラブなど、いまは韓国人が使っている。一般の住宅設備とは全く違って、アメリカ風に作られている。今はそれが生活向上の一つの目標になっているらしい。

団としての予定コースが終わってから、私は2つの肥料工場と仁川にある5つの諸工場とを見学した。忠州肥料工場はアメリカの援助によるものであり、湖南肥料工場はドイツの援助によるものである。アメリカの化学工学とヨーロッパの化学工学とを眼で比較する絶好の機会

であると考えて、見学できるように特にお骨折りを願った。多少、日程に無理があり、見学についても難点があった模様であるが、お骨折りを頂き、また、ご理解頂いたおかげでこの両工場を見ることができ、それぞれのお国ぶりを工場の姿、設備、設計の上で比較することができたことは私の大きなよこびであった。

この二つの工場が実際にどのような成績を上げるであろうか。それは工場設備だけの比較ではなく、工業用水製品市場などを含む工場の立地条件と工場の運営に当たる人々の考え方や活動にも関係するわけであるが、それにしても実際の成績が目に見えるようになれば、両者の比較検討は一層、有意義なものとなることであろう。湖南肥料工場における懇談会の席上でも、私はそのことを強調した。すなわち現在のトラブルを改善し、さらに研究を進めようとするときは、ぜひ近くにある同じ国営であるが、アメリカ式設計になる忠州肥料工場の状況を調査し、比較検討するのが、効果の多い方法であろうという話をした。若い聴き手はいずれも熱心な面持ちで、討議らしい雰囲気を一層好ましいものにしていた。

なお、ここでご紹介しておきたいことが二つある。一つは忠州肥料工場ではすでに総合研究所を作って、現工場操業には関係のない新しい工業分野、たとえば、アンモニアの酸化による硝酸の製造についてパイロットプラントによる研究開発を始めているということ。今一つは、湖南肥料工場ではその関係会社として Chemical Engineering 会社を作って、設計作業を始めているということ、の二つである。

4. 汽車の旅

最初の汽車の旅は、大邱→ソウルの夜行列車であった。汽車の窓はすぐに夕暮に包まれて暗くなってしまった。それでも裸の山の形、田畑や農家のたたずまいを少しは見ることができた。2回目の汽車の旅はソウル→忠州(宿泊)→光州で、2日間にわたって朝早くから夕刻まで、全くの視察旅行、心行くまで眺めることができた。

例の動乱の折に焼け出された裸の山々、その形はちょうど私の故郷、播磨の国の山々の形に似ている。何となく国へかえったような気安さでいると、やがて農家の群が現われて、「ああ、やっぱり違うんだ、農家ばかりで

はない、お墓も見給え、あの饅頭形のお墓も」と呼びとめられる。農家は決して富んではない。寒さを防ぐ構造でもあろうが、そればかりではない。電燈もまだついていない農村もある。昔、東北―北海道を通して樺太に行ったとき、よく見かけたどこかの寒村を想い起こさせる。

アメリカが余剰農産物を贈ったということをよく新聞で読んだが、それがこの農村にどんなふうに響いたのだろうか。動乱で物理的に荒らされたあと、今度は農産物の安値で、金銭的に荒らされたのではないだろうか。生産性の高いアメリカ農業が生産性の低い他国の農民を農村から離れさせ、市街地に溢れさせているということであろうか。世界的に生産性の競争が行なわれて、地域分業へと流れて行くのであろうか。

そんな思いにふけっている私の前に、元気のいい2人の青年が現われた。1人は私の知人、もう1人はその知人の友人であって、今は日本在住、妹さんの結婚式に出席するため、久しぶりに帰国する途中のK氏。めずらしい出合いに話はいろいろにはずんで行った。「ところで、Kさんはこちらに帰ってくることはどうなんですか」と聞いて見た。Kさんは即座に「私はまだ帰りません。南北が統一したら帰ってもいいが、南北が統一しないうちは帰りません」と答えた。私にはその意味が明確でなかった。「帰国することと南北統一とはどんな関係があるんですか。帰国して南をよくするように努力すべきじゃないんですか」と聞いて見た。

これに対する回答は長々と続いた。思いがけなく長々と続いた。そこには韓国人の違の本当の気持ち溢れるばかりに流れていた。(本当にもし日本が北は北海道、南は本州と二分されていたらどんなことになったろうか。親子・兄弟が会うこともできない、通信すらもできないという例が幾百とでてくる。改善のために意見を持ち情熱を持っていてもそれを堂々と表現できるだろうか。)

韓国人の違は政治的にも経済的にも非常に困難な状況に置かれている。アメリカが手を引くといったとき「これでどうなるのか」といった無力感が一時あったが、今は自分の力を知り始め「これは何とかなる」という気持ちが広い人の間に芽生えつつある由である。誠に結構なことである。どうか、一致団結して、よい韓国を作り、さらに民族の統一も実現できることを願っている。